

第12節 幼稚園の年少さんになったふたごたち

2003年4月。

満開の桜に見守られて、ふたごのリョウとタイは幼稚園の年少さんになった。

お兄ちゃんであるマサミツが3年間通った幼稚園であり、何度もお迎えにも行ったし、中にも入ったことのある、ふたりにとってなじみの場所である。

彼らにとって、はじめての社会生活のスタートだ。

入園式。

半分以上のこどもが泣いたり、わめいたり、親の横から離れられなかったり、落ち着きなく動き回ったりする中で、彼らは固まっていた。顔いっぱい不安を表現し、ころなしか、青ざめさえるように見えた。

この園では、今まで何組ものふたごたちを育ててこられた。どのふたごたちもクラスを分けて保育されるのだ。

「“ふたご”だといっても、ひとりひとりだから、べつべつに」というのが方針である。

そのことは以前から知っていたし、マサミツが3年間通っている間に、注目していた各学年のふたごちゃんたちの振る舞いや、そのおかあさん方の奮闘ぶりを拝見していて、リョウとタイはどんな幼稚園児になるのか不安半分、楽しみ半分で入園式を迎えた私である。

リョウは桃色の名札を、タイは赤色の名札を先生につけてもらって、それぞれの席に着いた。

「となり同士にすわってもらってもいいですよ。」

ふたごたちが離れがたい思いをしているのではないかと察して先生はタイの横の席を指しておっしゃったが、私は瞬時に「いえ、だいじょうぶです」と言うなり、リョウを桃色名札の群れに連れていった。タイに「リョウは向こうにすわらはるしな、おかあさんとおとうさんは後ろにすわって見てるからね。」と早口で言い残して。

親が隣についているわけでもないのに、ふたりをバラバラにすわらせることなど、未だかつてなかったことだ。ここで、ふたりが不安のあまり泣き出すというストーリーも充分考えられたはずなのに、なぜか私は「だいじょうぶ」と思った。

泣いたら泣いたときのことだ。ふたりとも泣いてしまった時のために、ひとりずつ親があたるよう、夫も入園式に参上だ。でも、私は“ふたりは泣かない”って思った。だって、「おとうさんとおかあさんは後ろですわって見ているからね」という私の言葉を理解していると確信できたし、それよりも泣く余裕もないくらいコチコチに固まっていたからだ。

騒然とした中、式は終わり、入園記念写真撮影のはじまりはじまりい～！！

ホヤホヤの4歳も混じっているが、ごく最近3歳になりましたって子もいる“3歳”が

集団でじっとして、せ～の！で写真におさまるのはとっても難しい。

基本的にじっとできない、ママの隣でないとダメな子どもが大半で、めずらしくじっとしている子は、ただひたすらガマンしているだけであり、ガマンの限界は最高3分。

カメラマンの腕の見せどころでもあるのだが、子どもは前2列、親は後3列と決まっているために、親の方も我が子が気がかりになり、

「これ、ちゃん、前！ホラ！お兄さん（実はおじさん）のカメラ見て！」とか、

「あー！！鼻ほじくったらあかんって！」とか、

「パンツ見せたらあかんってゆうてるでしょ！」とか……。

そのうち、出番を待っているもうひとクラスの子どもがカメラの前をスーッ……。

先生は子どもの注目を集めるためにタンバリンをたたき……。

そのタンバリンを触りたいと思った子が、走り出しあやうく三脚にぶつかりそうになり一同で「オーッ！」と大合唱。

さあ、ここで、入園式に出席するふたごの親としての心構えを。私は3年前に経験した同じ場所でのマサミツの入園式を踏まえた上で、以下の対策を立てて出席したので、万事うまくいった。

はじめての入園式の場合は、あらかじめ在園児の保護者から情報を得たり、園に問い合わせたりして流れをつかんでおけば、ふたご入園対策になるだろう。

- 1．必ず洋装で。和装をご希望の方は、涙で濡れる・着崩れ・髪の流れ等は覚悟を。
- 2．できるだけおとうさんとおかあさんのふたりで。無理な場合でも子どもの数だけ大人が同伴のこと。
- 3．ふたごのクラスが違う場合、どちらかひとりの親しか記念写真に写れなくても文句は言わない。
- 4．カメラはおとうさんもおかあさんも両方が持っているといい。

幼稚園の数だけ入園式があり、その進行方法もまた各々であるために一概には言えないことは承知の上で様子を述べると。

私は桃色名札のリョウを最前列にすわらせ、「おかあさんは後ろで立って見ているからね、あのカメラで写真撮らるはるからね」とひとこと言いスタンバイする。

ここでも親子が離れてしまう状況になるが、足元にすがってこられたりしても（1）の洋装を選択していれば、着崩れは心配ない。なんたって親に余裕が生まれる。

それから約13分、桃色名札が写真撮影を終了するまで、夫はタイをがっちりガードし、タイとしゃべりながら緊張しているリョウやニコニコ顔の私をカメラに収める。

（4）のカメラ2台は「おい、カメラ！」「あら、あたしが持っていたのね」ってことがないので行動がスムーズ。

「桃色名札組は先生と一緒に部屋へ！」と声がかかると、夫は私にタイを手渡し、リョウと共にピンク名札軍団と合流。

(2)でこどもの数だけ大人がいないと、先生の説明か写真撮影かを選ばねばならず(とりあえず写真!)、あたふたすることになる。

うちのふたごはイザというときは“おかあさん”にすがってくる。式の間ずっとがんばって泣かないでいた後は、夫には申し訳ないが“おかあさん”でないとダメになるだろうと予測していたし、後々クラス写真を見た時、ちゃんの“おとうさん”よりも“おかあさん”が写っていたほうが都合がいいので、写真には私が写ることは了承済みだった。

(3)の写真に両親とも写れる場合は最高。ふたごのクラスが分かれなない場合は大きな問題はなし。

赤色名札組の写真撮影の時には、私はリョウに言ったセリフをタイにリピートし、また約13分間じっとしている。その間、カメラマンさんの「後ろのおとうさん、おかあさん、一生残る写真ですからねえ、ネクタイとかちょっと襟元とか、今のうちに直しといてくださーい。」というのを聞く。

2回目の写真撮影後、タイの属する赤色名札組軍団と一緒に部屋に行き、明日からの登園の注意事項を先生より聞いて、紅白まんじゅうをもらって……めでたく終了!

かくして夫は記念写真に写ることなく疲れただけの入園式であった。それでも、おまんじゅうをもらって嬉しそうなふたごたちを見ているだけで私はひと安心。泣かずにいてくれただけでよかった。

マサミツがこの幼稚園に入園した時、この子たちは生後6ヶ月であった。ふたご用ベビーカーでお迎えに行くと、必ずどちらかが泣いていた。あんなに小さいスペースで足を存分に伸ばして、バスタオルを半分にたたんだので体全体を覆って寝ていた天使たちが、一人前に幼稚園デビューを果たした。

その頃も知ってくださっている先生方は、「あの時、あんなに小さかったのにね。おかあさん、よう頑張らしたね」って私の苦勞をねぎらってください。

いえいえ、確かにしんどかったしクタクタだったけど、想像していた幼稚園への入園がこんなに早くて嬉しい思いがいっぱい。

どうやらこの場所が気に入っているようだ。桃色と赤色の名札をいとおしそうになでているリョウとタイは、ネクタイ(100円均一ショップで買って、太さを半分に割ってこども用を作ったのだ)を締めていっちょまえ!

「明日からここに毎日来る?」って聞いてみた。

「行く!」「うん!」オッケー!合格だ。

ワーワー泣いている子たちの中で、自分たちも泣きたかっただろうに、「おとうさんとおかあさんは後ろですわって見ているからね」という呪文を信じて先生のお話を聞いて

いたリョウとタイ。

ここを卒園して1年生になったお兄ちゃんのために、ほとんど毎日お留守番に来てくれたばばちゃんのお手製半ズボンと半袖シャツがとってもよく似合う。

どんな幼稚園生活を送るのかな。

しばらくはクラスが違って一緒に遊ぶことが多いだろうな。家でやっているのと同じように戦いごっこをしてお友達にケガはさせないだろうか。

心配は尽きないが、はじめ良ければすべて良し！？

大きくなったね。ほんとうに大きくなったね。

入園おめでとう。